

# 『保元物語』の父と子

橋 口 晋 作

『保元物語』は、崇徳上皇と後白河天皇、関白藤原忠通と左大臣藤原頼長という朝廷上層部の兄弟間に生じた対立を源氏、平氏を中心とする武士の力によつて解決した保元の乱を扱った軍記物である。朝廷上層部の兄弟間の対立と記したが、その対立の経緯を見て行くと、そこには、皇室、摂関家それぞれの父親のこれら子供に対する扱いの差や、子供の思惑が深く関わっていた。この朝廷上層部における父の特定の子供に対する偏愛、他方の子供の父の処置への反発が、武士の家、特に源氏の父為義と子供達、嫡男義朝と為朝を始めとする他の子供の関係にも複雑で、多様な運命をもたらして行く。本稿では、表舞台で演じられる兄弟間の対立、戦いの背後にあつた父と子の関係、有り様を『保元物語』がどのように語っているかということについて、皇室、摂関家、源氏の三つの家に分けて、考察して行くことにする。併せて、日本古典文学体系『保元・平治物語』<sup>(1)</sup>「解説」の第一分類本を中心しながら、第四分類本にわたつて、その語り方の違いをも合わせ見て行くことにする。取り上げた諸本は、第一類本が新日本古典文学体系版半井本<sup>(2)</sup>（以下、半井本と略称）、第二類本が古典研究会叢書影印鎌倉本<sup>(3)</sup>（以下、鎌倉本と略称）、第三類本が和泉書院版京都大学附属図書館本<sup>(4)</sup>（以下、京図本と略称）、第四類本が日本古典文学大系版金刀比羅宮本<sup>(5)</sup>（以下、金刀本と略称）の四本である。半井本の語り手は、保元の乱の全体を語ろうとしているようであり、登場人物のそれぞれに心をか

けるが、特に原因となつた事情を身をいれて語っている風である。これに對して、鎌倉本の語り手は戦乱の勃発までは淡々と事実を語っているが、頼長の死の場面や義朝が父と朝廷との板挟みの状態に陥る場面になると、語り手自身の感想などを付け加えて詳しく語ろうとしている。京図本と金刀本は、それぞれにこの両本の中間形態を示していると考えられる。また、編集の不手際が所々認められる鎌倉本、京図本に對して金刀本は完成本という印象が強い。「他の諸本に比べて最も年代記的であり、記録的傾向が強い。」と評されている半井本<sup>(6)</sup>は、語り方も鎌倉本以下の三本と異なっているのである。

## 皇 室

皇室で父と子といへば、鳥羽法（上）皇と崇徳上（天）皇・近衛天皇・後白河天皇兄弟、崇徳上皇と重仁親王などがあるが、保元の乱の原因として語られているのは、鳥羽法（上）皇とその子の崇徳上（天）皇の関係である。鳥羽法（上）皇と崇徳上（天）皇父子の微妙な反目を三箇所で見せて行くことにする。

鳥羽上皇と崇徳天皇の父子に問題が発生したのは、崇徳天皇の近衛天皇への讓位においてであつた。<sup>(7)</sup>冒頭の章段「後白河院御即位ノ事」に当たるところで、先ず、近衛天皇の誕生について「上皇殊二悦ビヲボシメシキ」と、鳥羽上皇の格別の喜びを伝える。そして、崇徳天皇の讓位、近衛天皇の即位に一気に運んで、今度は語り手が「先帝コトナル御ツ、ガモ渡ラセ給ハヌニ、ヲシヲロシ奉ラセ給フコソ浅増ケレ」と、鳥羽上皇の処置に對

する自身の批判的な感想を述べる。一方の崇徳上皇については「御恨ノミ残ケルニヤ」と婉曲に表現するに止めているが、「一院新院父子ノ御中不快ト聞エシ」と世間の噂さで父子の対立を匂わせる。更に、語り手は崇徳上皇の「御心中難知」と、聞き手を崇徳上皇の心中に引きつけてこの記事を終える。さて、この崇徳上皇の讓位に納得出来なかつた思ひは、後の「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところで、「嫡庶ニヨラズ、器量ヲモ撰ビ、外戚ノ安否ヲモ尋ラル、二、是ハ、当腹ノ寵愛ト云計」という受け取り方と共に、「恨フカクシテ過」して来たと、明確に語られるに至っている。鎌倉本では後白河天皇の即位の記事が「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところまで出てこない。「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところでは、「事の濫觴」を語るところと崇徳上皇の内々の言葉の二箇所でのことに触れる。「事の濫觴」を述べたところでは、近衛天皇の即位までを鳥羽上皇の喜びに発した処置として語る。そして、崇徳上皇の恨みを「浅からさりしか共 法皇御計なりしかは新院力及せ御座さす」と述べて、語り手の感想などは付け加えない。上皇の内々の言葉は半井本と同内容だが、「人に向て面目を失 時に當て恥を懐く」という表現になつてゐる。京図本は、「後白河院御即位ノ事」に当たるところでは近衛天皇即位に至る経緯を語り、「一院と新院とたがひに御心よからずならせ賜ふ」とのみ伝える。「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところでは、鳥羽上皇の喜びから立太子を続け、近衛天皇の即位には鎌倉本と同じく崇徳天皇が上皇の処置なので何も出来なかつたと説明する。京図本は、半井本や鎌倉本で使われていた崇徳上皇の「御恨」という言葉をここではどこ

にも使っていない。金刀本は、「後白河院御即位ノ事」に当たるところは京図本と同様の文章であるが、一院・新院の対立を記す文の後に「帝もことなる御咎もわたらせ給はねども、御位を下しまいらせ給けり。是當腹御寵愛によりて也。」と、鳥羽上皇の処置であつたことを述べて、一院・新院の対立を鮮明にしている。「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところは、半井本に近いが、深い恨みを抱いたところが「人にたいしてめんばくをうしなひ、時にあたつてちじよくを抱く。」と、鎌倉本の表現に改められている。金刀本でも「御恨」という言葉は出て来ない。

次は、近衛天皇が崩御し、後白河天皇が即位した時である。半井本は、「後白河院御即位ノ事」に当たるところで崇徳上皇も「天下ノ諸人」も「我身コソ位二不被付トモ、重仁親王ハ、今度八位ニハ遁ジ物ヲ」と期待していたと語る。ところが、思ひの外に、美福門院が「誠ノ親ナラヌ御隔」から後白河天皇を「モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ申サセ給」うたとかで、後白河天皇の即位となつたと語る。「是ニヨリ、新院御恨今一入ゾマサラセ給」というが、ここでは鳥羽法皇は背後に退いているので、崇徳上皇の恨みの相手が父法皇とは言い難い。語り手は、崇徳上皇の恨みを「理ナル」と評して、崇徳上皇に同情的である。「新院御謀反思シ召立ツ事」に当たるところでは、上皇の日頃の思ひと左大臣頼長への言葉の二つがこのことに触れる。日頃の思ひは簡略に悔しさを述べただけであるが、近習との談話が頼長との連携に展開してゆく。そして、頼長への言葉では「父子ガ怨難押カリツレ共、故院、サテ御座ツル程ハ、ツナガヌ月日ナレバ、二年ノ春秋ヲ送レリシ」と明確にその「怨」みの日々が

語られている。鎌倉本は、「新院御謀反思シ立ツ事」に当たるところの語り手の「事の濫觴」の説明と崇徳上皇の内々の言葉、頼長への言葉の都合三箇所、右のことに触れる。半井本では「天下ノ諸人」の期待が崇徳上皇の執着を支えていたが、鎌倉本では崇徳上皇が「嫡々正統也」と考えていたことがその根拠となつて見られる。一方、美福門院が「引違られし」理由は、「近衛院のうせさせ給しは偏新院の呪詛し奉られる故也」という噂を聞いて崇徳上皇を「妬敷事」に思ったからとしている。崇徳上皇の心中を重祚か重仁親王の即位かと噂したということは半井本にもあつたが、鎌倉本の場合は、この風聞が鳥羽法皇の崩御の後に置かれるので、「今はさてのみ終に忍終へき事ならねは」と「御謀反」の決意となつている。しかし、この入れ替え編集には中途半端なところがあつて、この辺りの時がいつの時点なのか意外にはつきりしていない。この直後にある崇徳上皇の内々の言葉は半井本と同趣旨だが、近衛天皇について「天の授さる所明けし」という文があつて、「嫡々正統也」ということを強調している。三つ目の頼長への言葉も半井本と同趣旨だが、「一旦の寵愛に依 累代の正統を闕れたり」という近衛天皇の即位と紛れそうな表現を使つている。京図本は、「後白河院御即位ノ事」に当たるところと「新院御謀反思シ立ツ事」に当たるところ三箇所、の都合四箇所に記事がある。「後白河院御即位ノ事」に当たるところの内容は鎌倉本のものから崇徳上皇と後白河天皇の関係を省いたものになっている。編集作業のよくなものが行われたかと思われるが、これも中途半端で、本文の混乱も認められる。最後には、「真の親子ならぬ御中ほど心うき御事はましまさ

ず」ということが語り手の感想として付け加えられている。「新院御謀反思シ立ツ事」に当たるところの一箇所目は「ことの濫觴」を述べたところであるが、ここは鎌倉本に極めて近いものになっている。二箇所目は、これに続く上皇の悔しい思いが吐露されたところである。これは、直前の「新院御うらみふかりしか共」を具体化したものである（この場面になると、上皇の「御うらみ」という表現が出て来る）。「嫡々の正統たり」という言葉もあり、鎌倉本との近さを感じる。三箇所目、上皇の頼長への言葉も、鎌倉本の後半分といったものである。京図本は、鎌倉本の内容を簡略化した様相を呈している。金刀本は、半井本と同様に「後白河院御即位ノ事」に当たるところ、「新院御謀反思シ立ツ事」に当たるところの上皇の内々の言葉と同じく頼長への言葉の三箇所、このことに触れる。「後白河院御即位ノ事」に当たるところは、半井本と同様に万人が重仁親王と思つていたと語り、最後に語り手が美福門院の行為に対して「心うき」という感想を述べて終わる。美福門院の行為については、鎌倉本にあるような背景を語っている。「新院御謀反思シ立ツ事」に当たるところの上皇の内々の言葉は京図本のもの（二箇所目）に近い。頼長への言葉の方は、半井本の言葉で始まるが、後半は鎌倉本や京図本にあるようなものになっている。

「新院讚州二御遷幸ノ事」に当たるところでは、讚岐に流される途中の崇徳上皇が鳥羽の北の楼門の辺りで父法皇の墓に参詣したいと願い出たが、聞いてもらえず、遙拝したことが語られる。ここは諸本同じ内容となつている。

鳥羽法(上) 皇と崇徳上(天) 皇父子の語られ方を右にみてきた。法皇は、子上皇と直接向き合っているとは言い難く、愛妃美福門院の意のままに對しているという描かれ方である。一方、子の上皇にとって父の意向は絶対的で、例えそれが美福門院の意と分かつていても為す術がないという有様である。『保元物語』諸本は始めは語り手の口で、後は崇徳上皇の口で父子の關係に觸れて行く。語り手の説明の仕方は、半井本・金刀本のよくな時間を追った方法と、鎌倉本のような「事の濫觴」として纏める方法の二つがあり、京函本はこの二つを合わせたような体裁になっている。半井本、金刀本の語り手共に自分の感想を付け加えるが、半井本は上皇に同情的であり、金刀本は美福門院に批判的だと、微妙な違いを見せる。

## 撰 関 家

撰関家では、父知足院殿忠実と子悪左府頼長、法性寺殿忠通の二組の父子がある。忠実を鳥羽法(上) 皇とすれば、崇徳上(天) 皇の立場に立つのは忠通ということになる。しかし、その成り行きは皇室とは全く異なるものになる。

先ず、忠実・頼長の父子の有り様からみて行くことにする。この父子も三箇所に分けて考察して行く。

半井本は、「新院御謀反思シ召シ立ツ事」に当たるところで忠実が頼長を「御子達ノ御中ニコトニ御系惜ク」「大事ノ人」に思つて氏の長者に補し、頼長は「万機ノ内覧ノ宣旨ヲカウブラセ給テ、天下ノ事ヲ知食」したと語る。そして、「人傾申ケレドモ、父ノ御計ノ上ハ」「君モ臣モユルシ

奉ラル」と付け加えている。この同じ内容が、中巻の「関白殿本官ニ復帰シ給フ事」に当たるところで、南都興福寺に立て籠もつた忠実への人々の批判の言葉の中に見られる。鎌倉本、京函本、金刀本も「新院御謀反思シ召シ立ツ事」に当たるところの記事に前後が見られるが、内容上に大きな違いはない。

首に矢が当たつて、瀕死の重傷を負つた頼長が「入道殿二見へ奉り見奉テ、死ナバヤ」と言うのを受けて、一行は父忠実のいる南都に向かい、柞の森まで頼長を運んだところで、凶書允俊成が忠実に面会を求めに行く。

俊成は頼長の意向を伝え、「限ノ御有様ヲモ御覽ゼラルベキノ由」を申し入れるが、忠実は「走出テモ、迎進度思食サレケレ共、余ノ心ウサニ」「不運ノ者ニ対面セン事、コツナカリナン。目ニモ見ヘズ、音ニモ聞ヘザラン方へ可行」と言つて、拒絶する。語り手は、忠実の心情に理解を示し、「実ニサコソ思食ケメ。承モ悲カリケリ。」と付け加えている。しかし、俊成から忠実の返事を伝えられた頼長は、「御気色替セ給テ、御舌ノ崎ヲ食切り、血ヲハキ出サセ給フ」。語り手は、「何ナル御心向共難心得。威シカリケリ。」と、その場に居合わせたかのように、その時受けた印象を付け加えている。半井本の語り手は、この場面では、登場者の言葉でそれぞれの意向を表明させて行きながら、忠実の面会謝絶というところに至ると、身を乗り出して、自分の感想などを付け加え出すのである。鎌倉本は、頼長や忠実の言葉を省略し、語り手がその動きを伝えて済ませようとしている。頼長の言葉は全く出てこない。一方の忠実には「世に御憚ありければ」と、世への遠慮をはつきりと述べ、忠実の言葉も半井本のもの

の後半だけに止める（従つて、語り手の理解の言葉もない）。頼長が舌の先を食い切つたことについても、「御心の中しりかたし」と語るところまで、雰囲気を伝えることもない。京図本は、半井本と変わらないが、忠実の拒絶に対してだけは半井本程語り手の理解を示さない。金刀本は鎌倉本と同文である。

「大相国御歎キノ事」に当たるところで出家した藏人大夫経憲から頼長の最期を聞いた忠実は、繰り言を続ける。半井本では、死を確かめた後、「云置ク事ハ無リケルカ」、「何計カ此世ニ執ノ留ケンナ」と氣遣う。そして、先に自分が「暫ハ死ナジ物ヲ」と思つて、面会を拒んだことを悔やむ。頼長が摂政・関白に就くことを楽しみにして来たが、「命ノ長キモ由無事ニテ有ケリ」と言つて涙に暮れ、一度言葉は途切れる。ここで、語り手は、「争カ口惜カラザルベキ」と、忠実への同情を表明する。忠実は再び口を開き、この戦いで頼長一人が命を失つたことを悔やみ、「取替ル物ナラバ、入道ガ命ニ左府ガ命ヲ替テマシ」と言つて、涙を流し続ける。半井本では忠実の言葉は途切れる前よりも後の方が長くなつてゐるが、鎌倉本では前の方が長く、後の言葉は前の最後に述べられていた頼長にもう会えない悲しみが改めて続けられたものとなつてゐる。半井本の忠実が最初に述べる頼長の死や遺言を確かめる言葉が鎌倉本にはない。一方、鎌倉本には半井本にない「かかるへしと思はは 世を恐 人には、かりても等閑の事こそ」という言葉がある。京図本は、忠実の言葉を一回に纏めてゐる。半井本や鎌倉本にあつた頼長が摂政・関白に就くことへの期待がなくなつてゐるが、その他は流れよく並べ代えられてゐると評してよからう。

京図本の語り手も自分の感想を付け加えることはない。金刀本は鎌倉本と同文である。

次は、忠実・忠通の父子である。

弟頼長への偏愛の為に、氏の長者、内覧を取り上げられた忠通の父忠実への対応については、半井本の「新院御謀反思シ召シ立ツ事」に当たるところに「何事ニモイロワセ給ハズ」とあるのみである。しかし、忠通はその直後に後白河天皇に裁定を求めているので、父の処置に対して大いに不満だったのである。但し、同様の立場に置かれた崇徳上（天）皇と違つて、臣下の忠通には天皇に訴えるというもう一つの道があつた。

下巻の「大相国御上洛ノ事」に当たるところで、崇徳上皇、頼長の四人の子供の流罪が行われた後、忠通に父忠実を流罪に処するよう後白河天皇の命が下されるが、忠通が「配所ニ置ナガラ、世ヲ撰録セン事、如何有ベカルラム」と拒んだので、流罪は行われなかつた。半井本は、地の文を付せず、この忠通の言葉だけをぶつきらばうに語つてゐる。但し、この直後に語り手は、使者の信西入道が「泣く」後白河天皇に忠通の返事を報告したと説明しているので、この信西の感動を通して、忠通の孝子振りを描こうとしたものかと思われる。その後、南都にゐるのは不都合だということになつて、知足院殿に移そうとしたところ、忠実は「起請代ノ御書」を奉つてそのまま居続けることを願ひ出た。半井本の語り手は忠実に対して、「誠ニナジカハ思食忘ルベキ。関白殿トテモ、御子ニテ渡セ給フ。『サレバコソ』トゾ、人申ケル。」という意見を付け加えてゐる。余りはつきり

しない表現だが、忠実が孝子の忠通に誓ったことを当然と言いたいのであろう。鎌倉本は、忠通の流罪を拒む言葉を「枉て御免し有へき由を強く申させ給ける間」と、間接話法でなだらかに受けている。このため、信西入道が感動した由は出て来ない。後半の忠実の「御書」については、語り手が「其御書には起請の詞を載られたりけるとかや」と解説している（語り手が顔を出しているところであるが、感想、意見などはない）。忠通のことは出て来ない。鎌倉本は、孝子忠通を半井本程強調していないと言えるのではなからうか。京函本には「大相国御上洛ノ事」に当たるところがない。金刀本は鎌倉本に近いが、細部ではかなり異なる。先ず、忠通の拒否は、「父を配所へつかはして、其子攝祿として朝務に相交候はん事、忠臣の礼にあらず。」と、孝ではなく、忠の問題となっている。従って、忠通の言葉から地の文への続きも「然らば、忠通が關白辞表を召をかるべきか。』と、にがくしく申させ給ひければ」となっていて、これはこれで信西入道の登場しようもない。次に、南都からの移居の迎えだが、金刀本は「勅命に依て關白殿より御迎に人を奉らせ給ひたりける」となっていて、忠通が人を寄越したとしている。忠実は転居を拒み、「公家」に起請の「御書」を差し出した。金刀本は、後白河天皇への忠が前面に押し出されている。

忠実と忠通、頼長兄弟の父と子の関係で、前章の鳥羽法（上）皇、崇徳上（天）皇の關係に近いのは、忠実と忠通の關係である。しかし、臣下である忠通には後白河天皇に訴えるというもう一つの道が敷かれていた。半

井本は忠通を子の立場を弁えた、孝子として語る。一方、京函本は、孝子忠通を語ろうという気は全くないようであり、金刀本は孝行を退けて、忠節の問題として語ろうとしている。鳥羽法（上）皇に相当する位置にある忠実は、愛子頼長の死に立ち会うことになる。忠実は頼長への面会を求められて断り、後でそのことを悔やむ。半井本では語り手が忠実の言動への理解を示すが、他の本は語り手が感想などを付け加えることはない。鎌倉本の忠実は戦いに敗れたことで世間を憚り、そのことに悔やまされる運命に陥っている。金刀本は、前章皇室の記事と違って鎌倉本に近い表現となっている。

## 源氏

武家の源氏では、皇室・摂関家に見られたような父親の特定の子への偏愛が認められる訳ではない。しかし、皇室・摂関家の対立に巻き込まれて、源氏の為義と義朝、為朝を始めとする他の兄弟の父子は思いも寄らない運命に陥る。この源氏の父子の有り様を、為義と義朝、為義と為朝の二つに分けて次ぎに見て行くことにする。

先ず、父為義の子義朝への態度などから見て行こう。

半井本の「新院、為義ヲ召サルル事」に当たるところで、為義は「嫡子ニテ候義朝ハ、坂東ソダチノモノニテ候間、弓矢ノ道、奥義ヲ極」め、「一方ノ大將軍」の器量を備えていると左京大夫教長に語っている。そして、崇徳上皇方に参陣せよという要請に対しては、自身は「合戦ノ道ニ調練不仕シテ、無案内ニ候」ということと、「夢想ノツゲ候」と言うことと

を挙げて、八郎為朝を薦めている。為義には直接義朝と戦うことは避けた  
 いという気持ちも働いていそうである。このことに関連して、「白河殿攻  
 メ落ス事」に当たるところで、義朝に対峙して矢を放とうとした為朝が  
 「判官殿下野殿下申モ父子也。義朝八内へ参給へり。又、為義八院へ参  
 ラル、。『内勝セ給ハバ、汝ヲ頼テ、我ハ参ラン。院勝セ給ハバ、我ヲ頼  
 テ、汝ハ扶レ』ナンド、内々約束モヤ有ラン」と考えるところが出て来  
 る。そうして乱後、「為義降参ノ事」に当たるところで、実際、為義は義  
 朝が左馬頭に任じられたことなどを聞いて、「勲功ニ申替、ナドカ父一人  
 ヲ扶ケザルベキト思」い、他の子供の了解を得て、義朝の許に出頭するこ  
 とになる。しかし、「為義最後ノ事」に当たるところで、波多野次郎義通  
 から真実を知らされた為義は、「口惜事スル下野守哉。」と言い、「義朝  
 ガ加様ニ成テ、我ヲ打憑来ランニハ、入道方命ニモ申替テモ扶クベシ。」  
 と、子供への情愛（為朝が考えていた通りの）を語る。そして、「『イカ  
 程ノ栄花ヲ期シテ、父ノ頸ヲバ切ゾ。不当ノ者也ケリ』ト、親ニモ又疎ニ  
 モ定テ疎ミ終テラレンズルゾ。」と義朝の対応を悔やみながらも、平家  
 ではなく、我が子で良かったと言つて、切られて果てる。鎌倉本の「新  
 院、為義ヲ召サルル事」に当たるところの為義の言葉は、しぶしぶ為朝を  
 推挙する言葉と、「夢想ノツゲ」を語つて参陣を断る言葉の二つに分かれ  
 ている。この為義の返事に対して教長は「親はおや 子は子の事そかし」  
 と言つて、強引に為義を上皇方に引き入れる。半井本ではあまり現れてい  
 なかつた、父為義の後白河天皇方に付いた義朝への配慮が教長の言葉によ  
 つて明確になっている。崇徳上皇方（主君）によつて、武士の親子は敵味

方に切り離されてしまうのである。「為義最後ノ事」に当たるところで、  
 義通から真実を知らされた為義は、経文を引いて、「あはれ 親の子を思  
 やうに子は親をおもはさりけるよ」と自分に言い聞かせ、義朝が五逆罪を  
 免れるよう祈念する。そして、最後に「父を切る子 子に切る、父 切も  
 切る、も宿執の拙事恥へし」と言つて、急いで切るように命じている。京  
 図本の「新院、為義ヲ召サルル事」に当たるところは鎌倉本に近いが。  
 「為義最後ノ事」に当たるところ、半井本・鎌倉本では義通から知らされ  
 た為義は取りあえず「イカニ、疾ハ告ザリケルゾ」と言つた後車から降り  
 て繰り言を述べるが、京図本では驚きの言葉から繰り言までを述べた後車  
 から降りることになっている。義朝が五逆罪から免れるよう祈るところは  
 ない。しかし、その他は鎌倉本に近い。金刀本の「新院、為義ヲ召サルル  
 事」に当たるところは京図本に近い。一方、「為義最後ノ事」に当たると  
 ころは、驚きの言葉から五逆罪から免れるよう祈る言葉を続けた後、車か  
 ら降りることになっている。なお、言葉の言い回しには鎌倉本と共通する  
 ものが目に付く。

次に、子義朝の父為義に対する態度を見て行く。

義朝も、個人的に父為義に敵対する気のない事はほぼ一貫している。

「白河殿攻メ落ス事」に当たるところで、弟為朝の「ヤ、殿、下野殿、兄  
 ニ向テ弓引物ノ冥加ノ無ランニハ、父ニ向テ矢ヲ放ツ者ハ何ニ」という言  
 葉に沈黙したのは、半井本の語り手が「道理ナレバ、音モセズ。」と言つ  
 ているが、義朝も痛いところを突かれたというところであろう。また、為  
 朝の固める門を攻め倦ねた義朝は、父為義達の守る西の門に回つてここを

攻めるが、烈しく抵抗され、「現在ノ父為義ノ固タル門ヲ賣ル条、罪業ノ至、申モヲ口力也。」と思うことが語られている。そして、乱後、義朝は「勅命背キ難ト云へ共、父ニ向テ弓ヲ引、矢ヲ放テバ、人ニ越タル不次ノ賞ヲコソ蒙候ベキ」と、人倫に背いてまで父為義と戦ったことを強く主張する。「為義降参ノ事」に当たるところでは、義朝を頼つて来た為義に対して、鎌田正清に輿車を付けて迎えに遣り、「事ノ外ニ悦テ、様々ニ痛」わったので、父為義も「心安ク覚テゾ有ケル」という。しかし、その直後から、後白河天皇方の敵対者に対する態度は厳しくなつて行く。「為義最後ノ事」に当たるところで父為義を切るよう命じられた義朝は直ぐに正清に相談する。その後義朝の取つた処置は正清の進言に沿つたものとなつてゐる。為義は切られ、首実見を終えた後、首は義朝に返される。義朝は「何モ力ヲ興ニ取入テ、縁覚寺へ送テ、墓ヲ築キ、率都婆ヲ立、孝養」した。しかし、語り手は「請ズヤ思ケン、ヨボツカナシ。」という批判的な感想をこれに付け加えている。義朝は実直であるが、事態に翻弄されてしまふというのが語られた人間像であろうか。鎌倉本の「白河殿攻メ落ス事」に当たるところでは、為朝の返事から弓を番える行為に直ぐ続いていて、義朝側に全く言及しない。また、為朝の返事にも、義朝に宣旨と院宣の軽重を問う言葉が付け加わつて、返事に窮させるものとなつてゐる。更に、鎌倉本では半井本と異なり、為朝が守つていた門こそ父為義が固めていた門であつたとし、語り手が「彼阿闍世太子の父頻婆娑羅王を責られる五逆深重の謂をも知さりけるこそあさましけれ」と、義朝に批判的な感想を付け加えている。一方、「為義降参ノ事」に当たるところで、輿にか

かれて来た為義に義朝は対面して歓待したと語り、語り手は「のちはしらす入道殿いかはかりうれしく思はれけん」と付け加えている。更に、「為義最後ノ事」に当たるところでは、父為義を切るよう命じられた義朝は、「再三辞し申て 今度の軍功に申替へきよし歎き申」すが、聞き入れられず、正清に相談するという次第になつてゐる（半井本では義朝が手を尽くしたことが語られていない）。為義の処刑を任された政清は、半井本とは異なり、義朝に父為義との面談を勧めている。この面談で義朝は、命ばかりは「今度の忠賞に申かへ」と語り、東山に庵室を拵えたので、そこで念仏を唱えて過ごすようにと言う。喜ぶ父を見て、「むさんの御事かな」と思う義朝の心中が語られる。鎌倉本は半井本よりも義朝の引き裂かれた言動を具体的に語ろうとしている。皇室の章でも、撰閲家の章でも自身の感想などを加えなかつた語り手が、義朝については言葉を添えているのは注目すべきであろう。京函本の「白河殿攻メ落ス事」に当たるところで、為朝に翻弄された義朝軍が父為義の固める門に回るといふ展開がない点も鎌倉本に近いが、鎌倉本にあつた語り手の感想もなくなつてゐる。「為義降参ノ事」に当たるところや「為義最後ノ事」に当たるところなどは鎌倉本に近いが、後者にある喜ぶ父を見る義朝の心中は出てこない。金刀本の義朝関係記事は、鎌倉本に近い。

父為義と義朝以外の子供、特に為朝との関係を見て行きたい。

嘗て為義は、為朝が「オサナクテ、余ニ不用ニテ、兄弟ニモ所ヲモヲカズ、ヨソロシキ者」であつたので、「都ニヨキ、身ニソヘテハ悪カリナ

ン」と考えて、九州に追い下したという。しかし、その九州で為朝はやはり狼藉を働いたので、為義はその罪を負って、解官されてしまった。驚いて上京して来た為朝を為義は「折節、可然コソ候ラメ。為朝ヲ代官ニマキラセ候ハン。召テ、打手ノ大将仰ツケラレ候へ。」と薦めている。為朝の大将の器量への信頼は、崇徳上皇の前でも変わることはなかった。戦い破れた後、「為義降参ノ事」に当たるところで為義は義朝の許に命乞いに出頭することを決断する。この出頭について、為義は、「為義命生タラバ、若ワ殿原ヲモ助ルヤトテ頭レ行ゾヨ。」と為朝達に説明している。半井本は、父の恩愛をここでも語るのである。「為義最後ノ事」に当たるところで、切られることが分かった為義は「哀、八郎冠者ガ千度制シツル物ヲ。」と臍を嚙んでいる（なお、為朝の制止は直接は語られず、この言葉が暗示するに止まっている）。為義は、嫡男義朝に期待するよりも為朝の意見に従うべきであったことを述べて、命を終える。鎌倉本は、表現がやや異なるが、半井本とほぼ同じ内容となっている。京図本の「為義降参ノ事」に当たるところの為義は「わとのばらをたすくるまでこそなく共」と言っていて、為朝達を助けることが可能とは考えていない。金刀本は鎌倉本に近い。

崇徳上皇の御所に義朝達、後白河天皇方の軍勢が押し寄せて来て、為義に付いて来ていた為朝兄弟で先駆けの争いが起こるが、為朝は「親ノ前ニテ、兄ニ争イカケタランモ悪シカリナン」と、父に遠慮している。嘗て「兄弟ニモ所ヲモカズ、ヨソロシキ者」であったことからの遠慮は、義朝を射ようとした時にも、「親ノ免シモ無兄ヲアヘナク射殺テ、重テ不孝セラレテハ、如何アラン」と、思い止まらせた。戦い敗れて、比叡山に隠れている為義の許に集まった時、為朝は板東に下ることを進言している。後に為義は「哀、八郎冠者ガ千度制シツル物ヲ。」と後悔しているが、為朝の進言は武士らしい身の処し方であったといえよう。鎌倉本では、為義が義朝の許に出頭するという意向を聞いて、為朝は「色を失て音もせず」と語っている。為義と別れを惜しむ兄弟の中で、為朝だけは複雑な思いを抱いていたのだろうか。京図本は半井本に近い。一方、金刀本は鎌倉本に近い。

為義と嫡男義朝、八郎為朝の二組を取り上げて、源氏の親子関係を見て来た。為義は、嫡男の義朝も八郎の為朝もそれぞれに器量を認めているし、子として信頼している。一方、義朝も為朝も父為義に対して不孝者でありたくないと考えていた。諸本では、半井本よりも鎌倉本、京図本、金刀本の方が義朝の引き裂かれた心を具体的に語っていて、彼の悲劇を強調していると言えそうである。鎌倉本の語り手が義朝については感想などを付け加えていることは注目すべき点だと考える。父と朝廷との間で悩まされる人物として、『平家物語』の平重盛は強力な父清盛に苦しむが、義朝

は強力な朝廷に苦しむ人物として個性を得ている。しかし、『保元物語』では、為朝と対照されることになっていて、脇役に止まり、『平家物語』の重盛ほど強烈な光を放つには至らないのである。

### 纏めとして

『保元物語』は、皇室、摂関家、源氏の兄弟間の対立、戦いを中心に語っているが、冒頭に述べたように皇室、摂関家の父親の特定の子への肩入れ、疎外がその原因となっていた。鳥羽法(上)皇に疎外された崇徳上(天)皇と知足院殿忠実に肩入れされた頼長が結びつき、皇位が転がり込んで来た後白河天皇と忠実に排除されつつある忠通が結び付くという歪な対立が源氏の家族に思いも寄らない悲劇をもたらして行く。『保元物語』の世界において、父は子供にとって犯し得ない存在であった。これは、五逆罪という仏教哲学と習俗的生き方といったもので支えられていると見られる。しかし、『保元物語』は、その父と子の有り様の崩壊、破綻を描いた作品となっている。この点では、源義朝は『保元物語』の一面の主人公となるべき立場に位置している。しかし、『保元物語』の父子の恩愛、その悲劇は子の側ではなく、父の側、摂関家の忠実、源氏の為義の嘆きを中心として語られている。『保元物語』の達成の一つは、この父親の嘆きを聞かせどころとして保元の乱を纏めたことにあるのではなからうか。一方において、義朝は、父為義に推挙され、親不孝になる行為を慎みながら戦う為朝と対照される。このため、『保元物語』の義朝は為義の引き立て役に止まってしまい、『平家物語』で同様に主君と父の板挟みの位置に立た

される重盛の魅力に遠く及ばないものとなっている。本稿で取り上げた諸本で、半井本は、保元の乱の全体を示そうという風であり、特に原因になった鳥羽法(上)皇、崇徳上(天)皇の間に生まれた恨みから、乱の起りを力を込めて語っている。また、父法皇に疎外された崇徳上皇に同情を寄せたり、父忠実に押さえつけられた忠通がなお孝を尽くす人物であることを語るなど、偏りのない特徴がある。鎌倉本、京図本、金刀本の三本は、乱が始まるまでが整理されたり、忠通への関心が薄れたりしている一方、乱後の忠実、為義の嘆きには語り手が身を乗り出している観がある。父と子に焦点を当てて比較すると、『保元物語』は半井本の後、変質しているとも見れそうである。鎌倉本、京図本には編集作業の不十分さのようなものを感じることもあるが、金刀本は完成本という出来映えである。一方、京図本、金刀本は半井本と鎌倉本の取り合わせの印象が強い。このような点から考えれば、先の変質は鎌倉本から始まったのかもしれない。

### 注

- (1) 永積安明担当。昭和三六年七月。
- (2) 『保元物語 平治物語 承久記』平成四年七月。
- (3) 『保元物語 下巻』昭和四九年三月。
- (4) 『京図本保元物語』昭和五七年三月。
- (5) 鑑賞日本古典文学『保元物語・平治物語』(昭和五一年九月)の永積氏の「総説」から。
- (6) (1)の保元物語「解説」「二物語の構想・物語の内容」(栃木孝

惟氏執筆)に最初の事態として取り上げられている。

(7) 半井本に章段名がないことから、統一してこのような表現を使うことにした。

(8) (6)に第二の事態として取り上げられている。以下にも部分的に共通するところがあるが、特に注記したり、違いを挙げたりはしていない。筆者は、父と子に絞って、語り手の語り方を中心に考察した。

(平成十九年五月十日受理)